

19	安城	篠目中学校	スズキ リサ 名前 鈴木 莉咲
分科会番号	8	分科会名	音楽教育

研究題目 思いや意図を自由に表現することができる生徒の育成

研究要項

1 主題設定の理由

本学級の生徒は歌を歌うことを比較的好む生徒が多く、大きな声で歌うなどして積極的に自己表現をすることができる。しかし一部の生徒は、地声で歌ったり力任せに叫ぶような歌い方になったりしてしまう生徒がいるのが現状である。コロナ禍を過ごし、歌や合唱の経験が十分ではない生徒たちにとって、音楽的な歌唱表現を考えることはとても難しいものとする。

事前に行った音楽に関する意識アンケートでは、「その曲に合ったふさわしい強弱や速度で歌おうと工夫しているか」という問いに対し、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた生徒が88%であるのに対し、「音楽の要素同士の関わりを考えて歌っているか」という問いに対しては52%の生徒が「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」に回答している。ふさわしい表現をしようとして意識していても、音楽表現をする上で密接に関係している要素同士の関わり合いについてまでは考えることができていないということが分かった。そこで、歌詞や音楽記号の関わり合いや、音の配列の仕方を手がかりとし、曲に合ったよりふさわしい表現や独自の表現を考える力をつけさせたい。また、合唱コンクールに向けた練習の一環の場となるよう、考えた歌唱表現を実際に歌うことで表現をするために必要な技能を身につけられるようにしたいと考え、「思いや意図を自由に表現することができる生徒の育成」をテーマとして実践に取り組むことにした。

2 主題に迫る基本的な考え方

- 【仮説1】曲と楽譜に向き合う時間を設定し、意見を共有し合うことで、多面的に音楽を捉え、理解が深まるだろう。
- 【仮説2】合唱コンクールを題材として取り扱い、行事に対する熱意や思いと繋げることで、主体的に学び合う意欲が高まるだろう。
- 【仮説3】外国の歌唱曲を取り扱うことで、より様々な表現方法を思考・表現する機会を得ることができるだろう。

3 具体的な手だて

【仮説1 曲と楽譜を理解し、表現方法を考える】

- ① 楽譜に書かれている記号や曲の背景、歌詞の内容を理解する。
- ② 歌唱表現を考えさせたい楽譜を拡大印刷し、記号や歌詞、曲の背景を手がかりに歌唱表現を考え、話し合う場を設定する。

【仮説2 行事に対する熱意や思いと繋げる】

- ① 考えた歌唱表現を実際に歌って比較をし、学級にとってよりよい合唱になるように学級のパートリーダーを中心に話し合い、主体的に学び合う場を設ける。

【仮説3 海外の歌唱表現について考える】

- ① 合唱曲にはあまり使用されない歌唱表現を知り、表現する場を設定し、様々な表現法を知る機会をつくる。

4 抽出生徒について

抽出生徒 A

吹奏楽部に所属していることもあり、音楽に対する関心意欲が高い。授業に前向きに取り組むことができ、課題に対しても音楽的視点から考えることができる。しかし、考えた意見を発表したり、自分なりに表現しようとしたりする姿勢は乏しい。歌うことも得意なほうではない。自分で考えた表現等に自信をもち、積極的に実践できるようになってほしい。

抽出生徒 B

歌うことが好きで、音楽の授業も興味関心をもって受けることができている。生活態度も優秀なほうである。しかし、普段の学習プリントの様子を見ると、音楽の要素の仕組みを考えたり表現を考えるとときに具体的な言葉が書けなかったりすることが多い。思考力・判断力を高め、様々な表現法や歌唱法を考えられるようになってほしい。

5 研究の実践

本単元は13時間完了とし、①歌唱表現の手がかりを探す ②合唱コンクール曲の歌唱表現を考える ③カンツォーネの歌唱表現について考える の3つの学習構想を展開した。

(1) 仮説1に対する実践

歌唱共通教材「夏の思い出」を用いて自分たちの歌唱表現を考えた。歌詞の意味、情景、時代背景をおさえ、この曲のイメージが湧きやすくした。さらに、ひと班につき4小節のみを追求することで考える範囲を絞り、より深い考えが生まれることを目指した。自分たちの班に与えられた4小節についてタブレットの音源を聴いたり楽譜の中から読み取れる音符、記号、強弱歌詞、旋律の動き、伴奏方法を手がかりにしたりしながらふさわしい歌い方を考えた。示されている f や p は単に強くしたり弱くするだけでなく、具体的にどのように強く歌ったり弱く歌ったりしたいのか、



【資料 1】 班で話し合う様子

また、なぜそこに f や p があるのかという理由も繋げて考えさせた。どの班も楽譜から読み取れる手がかりを頼りに拡大楽譜への書き込みが進んでいた。(資料1)「1段目は伴奏の音の流れがぎざぎざになっているけど、2段目は違う動きをしている。」「この歌詞が体言止めになっているから言い切る感じで歌ったらいいんじゃない。」などと国語で得た知識を用いて考える姿も見られた。しかし、話し合いが進んでいる班は比較的音楽的知識が高い生徒がいる班であり、班の中に音楽が苦手な生徒が集まっている班は話し合いが進んでいないように感じた。(資料2)話し合いが停滞している班には、「“水芭蕉の花が咲いている”のところだけこの曲のなかで一番小さい p p になっているけどなぜだと思う」「“はるかな

【資料 2】 拡大楽譜

おぜ”のところに付いているフェルマータは何をイメージしたい、そしてどれくらい伸ばしたい」などの助言をし、歌詞と記号を結び付けた表現法に気づけるように指導した。さらに、班で考えた表現法を班ごとに発表することで、自分では気がつかなかった表現や考え方を共有することができ、新たな気づきへと繋げることができた。手がかりを参考にしながら自分たちならどのように表現するかを考えたことで、「この曲の中で一番伝えたいことは尾瀬のすばらしさだと思うからその素晴らしさをフェルマータの伸ばしに込めたい。」「楽譜に示されている記号や歌詞はすべて作曲者からのメッセージだから、作曲者の想いを読み取って歌えるようになりたい。」という振り返りが見られた。考えた表現を定着させるため、またその表現が本当にふさわしいのか確かめるために、実際に歌ってみる機会を設けた。しかし、考えることは容易であってもそれを実際に歌ってみるとなると難しいということに気づく生徒が多く、聴いていても何を表現したかったのかあまり分からないまま終わってしまう班もあった。考えた表現が人に伝わるように歌うためには、思っているよりも大きめに表現することが大切ということを伝えた。生徒 A は、楽譜の記号を理解しながら、音源の歌い方や音の感じに着目して振り返りを書くことが出来ていた。(資料 3) 生徒 B は、話し合いを通して歌うポイントを押さえることが出来た様子であった。(資料 4)

【資料 3】 生徒 A の振り返り

【資料 4】 生徒 B の振り返り

(2) 仮説 2 に対する実践

「夏の思い出」で学んだ、楽譜から読み取れる手がかりから表現を考えることができるという点を展開させ、合唱曲「いつまでも」の楽譜中に示された要素から考えられる表現を考察した。また、今回は同じ問題意識をもって取り組むために全班同じ小節の拡大楽譜を用意し、学級で比較し合えるようにした。数日後に控えている合唱コンクールに向けて、自分たちの合唱曲をより良いものにして良い結果を残したいという思いから熱心に取り組む様子が見られた。「冒頭の“忘れられない“は p がついているから優しく歌ったらどう。」「“忘れられない”のは海の香りだけ海の香りってどんなの。」など具体的に考えることができて

いた。生徒 A は話し合いの中で、はじめの歌いだしが一番重要だという点に着目し、静かな雰囲気の中で歌い始めてだんだん盛り上げたらどうかという意見を出していた。また、2 回目の「ふるさと」という歌詞は 1 回目よりも強く歌うことで変化が付くのではと話していた。この曲は、いつまでも変わることのない故郷や両親への想いが込められており、現代版「ふるさと」として東日本大震災で再度注目を浴びた。曲の背景と関連付けた考え方をしたり、学級の雰囲気や特徴と関連付けて考えたりと、前回の授業で扱った記号や歌詞以外の項目にも注目しながら考える様子も見られた。楽譜に示された作曲家からのメッセージを踏まえて、より自分たちに合う歌い方を定めるために 2 つの班の考えを取り出して比較をした。(資料 5) A 班(生徒 A の班)『忘れられないという儂さを表現するために“わすれられない”の「わ」を弱く p でうたう』B 班『忘れられないという言葉的印象強くするために「わ」を深いところから歌い始める』さらに、歌っている様子をタブレットで撮影し、歌い終わった後に聴き比べをした。(資料 6) 実際に聴くことで、「弱すぎる」「葬式みたい」「深いところから歌うってどういうこと?」「“わ”のまえに“う”を付けたら深くなるんじゃない」という反応があった。どちらの歌い方が「いつまでも」にとってふさわしい歌い方なのか考えさせた時、生徒 A は、「深く歌いだすのも大事だと思うけれど、静かな雰囲気で歌うほうも良いと思う」と他人の意見も受け入れながら、自分の考えた歌い方に自信を持っている様子であった。生徒 B の振り返りからは、よりふさわしい p の歌い方についての記述があり、音楽的視点から考えることが出来ていた。



【資料 5】 考えた表現を比較した場面



【資料 6】 実際に歌っている動画を鑑賞している様子

(3) 仮説 3 に対する実践

イタリア歌曲「サンタルチア」を用いて、今までの活動の応用としてカンツォーネの歌唱表現を考えた。フェルマータやアクセントといった記号を用いたテンポの自由な変化やイタリア語の特徴である巻き舌を用いながら、合唱曲では感じ取ることが難しい表現に注目しながら歌うよう指示した。普段歌わないイタリア語を用いての歌唱は興味をもつ生徒が多く、面白がって積極的に発音する主体的な姿が見られた。今回は、それぞれ歌い方の特徴が異なる 3 人の歌手が歌う「サンタルチア」をそれぞれ聴き比べ、①速度、②イタリア語の発音(巻き舌)③強弱について聴いて学ぶ機会を設けた。それぞれの特徴的な歌い方の中から自分が一番気に入った歌い方をグループで話し合って決め、参考にしながら表現して歌うよう指示した。グループの話し合いの中では「③の歌手の歌い方を聴いて、サビの前は m p と書いてあるけれど、気持ちもう少し弱く歌ったほうがサビがより強調されると思ったからそうしたい。」「1 つの音符に複数の発音があてはめられているから、歌詞があいまいにならないようにはっきり歌わなきゃいけないと思う。」「②の歌手の歌い方のように巻き舌をとっても強調して歌うと面白そう。」などと自分たちの「思い」をどうしたらそのように歌ったらうまく表現できるかという「意図」につなげて考えられる姿がみられ

た。表現を考える時間のなかで数回伴奏に合わせて歌う時間をつくり、自分たちが考えた表現が適切であるか確認するよう指示した。表現を考え、歌って確認して改善策を考えるという流れが自然と出来ていた。生徒 A は、聴き手側に曲想を感じ取ってもらうためにも速度を意識して歌いたいと発言していた。イタリア語の発音に試行錯誤しながらもグループの仲間と楽しそうに歌う様子が見られた。授業のおわりに、考えた表現を学級に発表する時間を設けた。歌いたい班の挙手制で発表を行った。(資料 7)



【資料 7】 実際に「サンタルチア」を歌う様子に伴奏の速度や強弱を臨機応変に変え、自由に歌わせた。アクセントを長く延ばして強調する班や、フェルマータを思い切り延ばす班、あっさりときれいに流れるように歌う班など、様々な面白い歌唱法で歌うことが出来ていた。振り返りには「歌う人によって表現が変わって面白いと思った。」「グループで話し合うことで、自分では思いつかなかったたくさんの歌い方があることが分かった。」というように、様々な歌唱表現に気づきながら他の意見を受け入れている記述が多くあった。また、「巻き舌ができないけれどリズムやアクセントを真似したらイタリア語っぽく再現できた。」「音の上がり下がりや強弱が頻繁に変わるから合わせるのが難しかった」など、音楽の要素と絡めて曲の分析をしている意見もあった。生徒 B は、合唱コンクールの練習の時に学んだ相手に伝わる歌い方に関連付けて意見を述べ、考えを深めることができていた。(資料 8)

自分が強弱をつけてるつもりでも、相手に伝わらないとあんまり意味がないので、声の大きさだけでなく声の太さにも気をつけたいです。曲の山を強調させるには、自分の想像している強さよりも、強うことが大切かなと思いました。感情をいれるためにも、歌詞の意味にも目をつけたい。

【資料 8】 生徒 B の感想

6 成果と今後の課題

歌唱表現を考える機会を重ねていくにつれて、思いをもって表現を考えながら歌っている時のほうが、以前よりも歌に対する思いや歌おうとする意欲が高まっているように感じた。学習プリントの内容からも、“このように歌いたい”という「意思」や「思い」を“どうすればその思いを表現できるのか”という「意図」に変換することが出来ている様子が伺えた。

(資料 9) さらに、考えた表現を「確認」する作業を入れることで、さらにもっとこうした、こう表現ができるのではないかという思考につなげることができたと考える。しかし、振り返りの中には何を考えたらいいいのか全く分からなかったという意見もあった。楽譜を与えられてその中から表現を考える手がかりを探すという作業は、楽譜が全く読めない生徒にとってはとても難題だったのではないかと考える。一人ひとりの音楽能力の差やソルフェージュ力の差が個人で考える時にも班で考える時にも顕著に表れていた。特に班活動では音楽能力が高い生徒が話し合いを進め、その他の生徒はその話し合いに参加できないまま時間が流れてしまい、一部の生徒の意見で班の意見が決まってしまうという状況があった。現状把握

26小節目ではおたやかを休めさせるため、だんだん遅くのリタルタドを置く
原譜はデクレシェンドでだんだん弱くおたよから、記号は違っているけど
遅くも弱くも系統が似ていると思ったのでどちらもおたやかを休
めさせるにはつながっていると思いました。

【資料 9】「思い」を「意図」に変換している記述

の甘さと、班の構成まで考えることが出来ていなかったことが反省点である。今後、班活動を行う際には、できる限り班員の能力を見定め、一人ひとりの意見が取り入れられるような構成を考えたい。今回、生徒 A は音楽的知識があることで、話し合いの場面では自分なりに考えた意見を積極的に発言する様子が見られたが、考えた意見を実践に移すところまでには至らなかった。アプローチの仕方や、もっと自分の意見に自信をもつためにも、机間指導の際に印を打ちながら回ったり、教師からの積極的な声掛けをしたりすることが大切であると考える。また、人前で歌っても恥ずかしくないと思えるような環境づくりも大事であると感じた。

生徒 B は今回、授業を重ねるごとに、歌唱法について具体的に考えられるようになっていた。学んだ知識を生かし、応用して考える力が備わってきたように感じる。しかし、「表現」と一言で言い表しても歌いたい歌い方は人それぞれであり、正しい歌い方がどのような歌い方であるのかが断定できなくなる場面が多々あった。「なめらかに歌う」や「情熱的に歌う」といった表現が、どのように歌えば滑らかになり、情熱的になるのかということまで個々でさらに追究する必要があると感じた。「思い」を「意図」に変換することができても、「思い」や「意図」を表現するための技能が身につけていないと「自由に歌唱表現をする」という課題はかなり難しいと感じた。

次に、今回行事と絡めた実践の成果として、授業に対する集中力と熱意が高まったことが挙げられる。合唱曲と向き合い話し合いを重ねる中で、合唱曲に対する思いが高まり、その思いが歌を歌うときの集中力に変わっていたように感じる。本学級は普段の様子からみても、とてもエネルギッシュな生徒が集まっている。そんな生徒たちが今回、集中力が必要な繊細で美しい旋律の曲である「いつまでも」の練習に取り組み、優秀賞を取ることができたのも、普段のエネルギーを歌声に変え、生徒一人ひとりが思いと熱意をもって真剣に練習を重ねた結果だと実感した。はじめはパートリーダーを中心にアドバイスをしあっていた雰囲気が、練習を進める中で、様々な生徒が授業で習った言葉で話し合う姿が見られるようになった。普段、音楽に対する苦手意識がある生徒でも行事を盛り上げる学級の一員として一生懸命歌う様子が見られた。今後も歌うことの楽しさや表現を考えて実践することの面白さを感じながら授業を受ける姿がみられるとよいと思う。さらに、今回は拡大した楽譜を用いて合唱コンクールの練習を行ったが、授業内だけの一度きりの使用で終わってしまったことが反省点である。多くの意見が書かれた楽譜を学級に還元し、学級での合唱練習で使うことができれば、授業外でも学びを深められる機会があったのではないかと考える。その場のみでなく、先を見据えた授業計画も大切であると感じた。今回の研究を今後の教科指導につなげていきたい。